

世間の人々の身持ちが重々しくなっていること

総じて上・中・下の人々の身分の持ち方は、それぞれその分際相應の適当な程度であるべきなのはもちろんだが、その各分際についてどのくらいが相應で当たり前かという事は、確かな手本がないので実は決めるのは容易ではない。しかし古今の間を広く見渡して検討してみると、今日の人々の身分の持ち方は、上・中・下共一様に、分際よりも格段に重々しくなり過ぎてている。

まず上について言えば、今の大名方の御身分の重々しさは上古の天子（天皇）・中古の大将軍などの御様子よりも勝^{まさ}つて何事も重々しいのである。それに準じて中・下の人々も皆同様に、例えば今日千石も俸禄を取る武士は、昔なら一万石から四、五万石も取っていた人に匹敵する重々しさである。百石を取る人は、昔千石から四、五千石も取っていた程の人と同じである。

このように上・中・下皆一様に身持ちが殊の外に重々しいために、それに準じて分際不相応に心の持ち方も重々しい身分のようになり、昔は大名が自分でした程度の仕事も、今は百石、五十石くらい取る程の人も皆、下の者に言い付けて仕事をさせて、自分ではしないとい

う様になつてしまつた。裕福な町人などはなおさらである。ところがこれは天下一同の事であるために、それぞれが分際に過ぎていくという事を自覚せず、「初めからこうであるはずの物」とばかり思い込んでいるのである。

身分を重々しくすることの弊害

身分を重々しくすることは贅沢とは別の事のようにだが、これはまさしく大いなる贅沢である。その中で普通の人の贅沢はその人だけのことで、その害が他に及ぶことはないが、上に立つ人の贅沢はその害が領内に及ぶのである。

一般に太平の時代が久しく続く時は、いつのまにか世の中の物事は華美になり、次第に人の身持ちも重々しくなるものである。折を見てこれを抑えることをしないで放置しておく、年月を経るにつれて増長して際限がない。そのうち次第次第に世間が困窮し始め、ついには好ましくない事が起こるのである。既に近頃は大名の家々でお金が足りず、多くは御財政が大いに逼迫ひつぱくしているが、すべてこのためである。昔は諸大名はいずれも、毎年大規模な軍役などをお勤めになつた時ですら、今のように逼迫ひつぱくすることはなく豊かだったのに、今の時代は軍役など一度もお勤めになることもなく、領地から上がる年貢は、新田の開拓な

どで多くなることこそあれ、昔よりも減つたことはないのに、かえつて御財政がひどく逼迫するのはどういう事だらうか。まづたくこれは世の中が次第に華美になり、いつとはなく自然に御身分が余りに重々しくなつて、何につけても御出費が昔より格段に多いからである。だからと言つて、目に見えて以前からの慣例と格段に変わつてゐるわけではないだらうが、直接目に見えない物事の中に大いに変わつて來てゐることが多いはずである。

さて御身分の重々しさによつて次第に御出費が多くなつた訳は、まづすぐに目につくのは飲食・衣服、それから日常の道具・家具などだが、これらは大名の御身上であれば何ほどの事でもない。それなのに世間で儉約と言へば、まず第一に飲食費・衣服費・交際費などを切り詰める事になつてゐるが、これは下々の身上でこそ大きな違いがあるものの、大名の御身上ではこれらの儉約だけでは御財政の改善という程の事は大して実現できないであらう。これらの外に、すぐにそれとは気付かない諸事の中に莫大な出費があることが多い。

まず御身分が甚だ重々しい事によつて、それに関連したすべての事を格別に重々しく取り扱ふものだから、武備・国政以外に御身分に関する様々な役人などが多い。一人で済むはずの事にも上役・下役と数々の役職があつて多くの人が関わり、さほどでもない事にも多くの

人手間がかかっている。次第に事も頻繁になり、消費も増え、その一つ一つの取り扱いに一つとして御出費の不要なものはない。また上役・下役と役人が多ければ、横道に抜けていく（明朗でない）支出も多いであろう。

一般に上の事を下々で取り扱う事が余りに重々しいために、下の煩いになることは申すまでもないが、無益な費用も甚だ多いのである。その細かな事情までは上の方はお気付きになりにくいであろう。かの飲食・衣服などの類も、上がお召しになることはどれほど美を尽くしても高が知れているが、それを下で余りに重々しく取り扱うために、役職なども多く、ひたすら念を入れる事を良い事とするしきたりである。そのため年月を重ねるにつれて諸事が重々しくなり、無益な事に嚴重に念を入れるものだから、何につけても出費が甚だ多いのである。

すべての事を余りに大切に重々しくする時は、ただ無益の出費・無益の世話ばかり多く、かえつてその本来の實質を失い、うわべだけのものになって、粗末に取り扱うよりも結局はるかに劣ることも多い。またかえつて手続きが煩雑で甚だ不都合な事が多い。例えば直接殿の御前に伝えて良い事をも、こちらの役人の手を経て、あちらの役所にお伺いを立てて

などとあれこれと手順を踏むために、無益の人手間がかかり、紙や筆を浪費するばかりで、かえって急ぎの御用の処理などは滞って何の益もない。すべての事をこれになぞらえて理解するべきである。

昔はもつと質素であつたこと

およそ今日の大名方の御身分に関する諸事の取り扱ひを見ると、十の内、六か七は皆省いても良い事ばかりである。これは皆以前からの定まりのように思っているが、昔は総じて物事が無造作で今日のように重々しくはなかつたので、何事も出費は今の半分もかからず、かえつて手続きも簡素で良かつたのである。

そこで軍記物などを読んで、昔の大名の身分・働きを今の様子と比べてみて、今の時代は甚だ重々しいことを認識するべきである。主君がそうであるだけでなく、家中（かちゅう）（家臣）までも皆それぞれの身分で分際よりも殊の外重々しくなっていることは既に述べた通りである。これらは戦国の時代と太平の時代とを一概に論じるべきではないけれど、今日のありさまは余りに重々し過ぎる。例えば上役から下役まで甲・乙・丙・丁の役人が仕事をするのに、昔は甲が自ら取り扱つた事をも、今は乙に言い付けて取り扱わせ、以前は乙が勤めていた仕事

も、この頃は丙に勤めさせるようになり、昨年までは丙が自分で勤めていた事も、いつのまにか今年は丁に勤めさせて、丙は直接手を下さないというようになっていく。総じて下々に至るまで武士の身持ちが次第に重々しくなっていくにつれて、国中の政治のためにも良くないことが多いのである。右のように身を重く持つことで、自然と家内の暮らしも良くなつて、身を勞することは少ないけれど、出費は多いので結局はおのおのにとつても損である。

さてまた諸大名の江戸御往来の人数は並外れて多い。今の大名の御往来の人数はまさしく軍陣の人数である。平時の往来にここまでおびただしい人数をお召し連れになる事は、古来日本でも唐土でも聞いたことがない事で、無益の出費が多いはずである。ただしこれは、昔戦国の時代から間もない頃の御定めであり、武備に関わり公儀（幕府）に関わる御事であつて、今私わたくしに減らすことはできない訳もあるのかも知れないが、今の平和な御世のありさまを考えると、大いにお減らしになって、五分の一位でも良いだろうと思われるのである。

さて主人のお共の人数の多さに準じて、家中かちゅうの人々の普段の往来のお共の人数も甚だ多い。従者一人でも良いはずの程の人も三人、五人を召し連れ、三人、五人くらいで良いはずの時も二十人、三十人、五十人も召し連れていらっしやる。このように人数は多いけれど、

緊急の時に役に立つ従者はまれだろうから、これは皆無益の人数で、ただ外見の立派さと往來の途中の用事を自由に処理する事の二つの役に立つに過ぎない。たとえ武備のためになるにしても、このように穏やかに治まった御代の普段の往來に、ここまで多くの人を引き連れなくても何の過ちがあるだろうか。所詮^{しよせん}ただ身分を重々しくするための飾りになるだけである。

さてまた江戸詰^{えどづめ}の人数も、これまた恐らくは公儀^{こうぎ}の御定めがあるのかも知れないが、平和な御代にしては甚だ多く、費用もおびただしいであろう。御領内の政務の方面は皆国元で取り行われるのだから、江戸御屋敷の御用としては、ただ公儀^{こうぎ}の御勤め、および御親類方その他との御交際、ならびに御国元とのやり取り等のみであり、その他は大体皆御方々の御身分に関する御用だけであろうから、必ずしも武備のためにもならず、ただ御身分の重々しさのために付いている男女の人数が甚だ多いのだから、無益の御出費はおびただしいはずである。

大体右の事など、今の人は今の通りを当たり前前の御事と思うだろうが、まったくそうでは

9 江戸詰―諸国の大名・家臣が江戸の藩邸に勤務する事。